

# 飛び出す'87新

文・鶴木 遵  
写真・米山邦雄/小寺幹雄



## 伊藤暢康

(いとう・のぶやす)

美浦・大和田稔厩舎  
昭和43年11月17日生 18歳  
宮城県出身 160<sup>cm</sup> 45.4<sup>kg</sup>  
血液型・O 蠍座  
趣味 スポーツ(サッカーなど)



## 姥名正義

(えびな・まさよし)

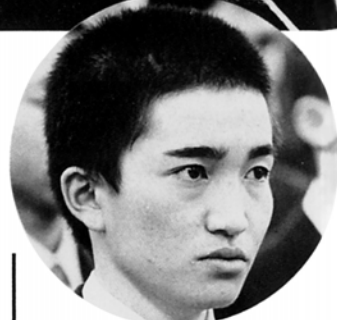
美浦・矢野進厩舎  
昭和44年3月19日生 18歳 北海道出身  
162<sup>cm</sup> 47.2<sup>kg</sup> 血液型・A 魚座  
趣味 音楽鑑賞



## 寺島祐治

(てらしま・ゆうじ)

美浦・沢峰次厩舎  
昭和43年3月12日生 19歳  
群馬県出身 160<sup>cm</sup> 44<sup>kg</sup>  
血液型・A 魚座  
趣味 読書、映画鑑賞



## 合谷喜壮

(ごうや・きそう)

栗東・島崎宏厩舎  
昭和43年4月9日生 18歳  
福岡県出身 157<sup>cm</sup> 44.4<sup>kg</sup>  
血液型・B 牡羊座  
趣味 音楽鑑賞、映画鑑賞

幸福は牧場にいる。  
早く駆け出せ、早く駆け出せ。  
幸福は牧場にいる。  
早く駆け出せ、早く駆け出せ。  
幸福は逃げてしまおうぞ。

(ポール・フォール 幸福)

春が来た。  
陽光は日に日に熱を増し、水はぬるんで海へと向かい、新しく生まれた芽は、やがてはじける日を待ち望んでふくらんでいる。  
春。希望に満ちた出発の時。少年たちもまた、自然の息吹と呼応するかのように、それぞれの新しい出発の瞬間を迎えている。  
もちろん、彼らを待ち受ける前途は厳しい。しかし少年たちはいつも、「早く駆け出す」として、遙かな道のりを少しでも先に進もうと決意しているのだ。結果を怖れぬ若さ以上のものを、さしあたり彼らは自らの武器として持ち得てはいない。

二月十七日。船橋市郊外にある中央競馬会競馬学校で、第三期生の卒業式が挙行された。三年間にわたる騎手課程を終え、この日晴れて卒業を迎えたのは、九人。約十倍の競争を経て競馬学校に入学した同期の十二人から、すでに三人が消えていた。

中途で退かざるを得なかった者たちのことを、その後おそらく残った九人が想い出すことは無かつたらう。見て見ぬ振りをするのも、もう一度だけ頑張れと引き止めるのと同じ価値あることなのだ。生存競争に耐えうる孤独な精神力は、アットホームな優しさからは養われはしない。残った九人の少年たちが挑もうとしたのは、まぎれもなく騎手という名のプロ世界だったからである。  
少年たちが夢を抱いて「早く駆け出す」ためには、まずは騎手のスタート地点にまで自分をたどり着かせることが必要だった。その

必要を満たすために彼らの競馬学校における三年間は存在した。飽きる程の落馬に耐え、減量に苦心し、泥だらけの汗にもまみれ、あるいはかじかむ手に白い息を吹きかけもした。三年間はこうして過ぎた。

☆ ☆  
静かにじっと見守る関係者の前を、真紅のトレーナーとベージュの乗馬スポン姿で晴れやかに駆け抜けた「騎乗供覧」が、九人の少年たちにとって競馬学校における最後の騎乗だった。そしてその最後の騎乗こそ、実は彼らにとって新しい闘いの開幕ベルでもあったに違いない。

観覧席では、柱の陰で照れ臭そうに愛息を見守る武邦彦調教師の姿があった。しかし彼の騎乗を見つめる眼は、不思議な程真剣だった。  
☆ ☆  
騎手の道は、免許をもらってからの厳しく始まるんです。全ては、競馬に行つてからの問題なんですわ。今はとにかく三年間無事に過ぎただけでありがたく思ってます。今日卒業する九人が、これからも元気で乗ってくれば、それで良いんです。

一流の騎手であった彼の言葉には、愛息の成長を喜ぶ親心と同時に、騎手というプロ世界につきまとう試練の厳しさが見てとれた。

☆ ☆  
つつがなく式典が終わって、大貫競馬学校教育課長は、

「この三年の間に、教官と生徒がいれば肉親以上に愛情を原点としてつなげることが大切なんです。その意味で、担当は三年間の持ち上がり制をとっています。今年の卒業生は真実教官の担当でした。三期生を今日送り出すことができて、ようやく競馬学校として一回りしました。施設は計画通りに完成し、これからはより一層の結果を出していくのが目標です。」





## 町田俊夫

(まちだ・としお)  
美浦・大久保良雄厩舎  
昭和44年3月18日 18歳  
千葉県出身  
159.6<sup>cm</sup> 46.8<sup>kg</sup>  
血液型・O 魚座  
趣味 スポーツ(野球、テニス)、音楽鑑賞



## 長峰一弘

(ながみね・かずひろ)  
美浦・和田正道厩舎  
昭和42年7月14日生  
19歳 茨城県出身  
164<sup>cm</sup> 46<sup>kg</sup>  
血液型・A 蟹座  
趣味 音楽鑑賞



## 塩村克己

(しおむら・かつみ)  
栗東・小林稔厩舎  
昭和44年1月5日生 18歳  
大阪府出身  
157<sup>cm</sup> 45<sup>kg</sup>  
血液型・A 山羊座  
趣味 音楽鑑賞、スポーツ

## 武豊

(たけ・ゆたか)  
栗東・武田作十郎厩舎  
昭和44年3月15日生 18歳  
滋賀県出身  
168<sup>cm</sup> 47.5<sup>kg</sup>  
血液型・O 魚座  
趣味 音楽鑑賞、映画鑑賞、スポーツ全般、茶道



と、語った。彼の言葉は自信に溢れていた。この自信を裏つけたのは、かつて名騎手として誉れ高かった野平祐二調教師である。今の競馬学校の卒業生(二期三期生)は、すばらしいと思います。馬事公苑時代よりも「うまい」と言っても良いでしょう。現在トレンに実習に来ている二年生を見ていても、びっくりしてしまいます。これも教育と指導方針の成果だと思います。

——若いうちは、若さを強調する弾力が必要で、固まってしまうたらダメなんです。甘さが良きでもある。そう言ってる程度量も教える側には必要なんです。その軽快さと弾力を高めていくと、やがて大成もする。要は何とでもなる可能性を秘めた子らが、競馬学校の教育を受けた若者たちに多い。これは今までに無かった傾向です。

——確かに情報も増えているし、JCのよい影響もある。当時18歳のアスムッセンや16歳のミグリオレといった若くすばらしい騎手を知ることができましたね。ただ、可能性を持った子らに対して、良きアドバイザーが少ないのが、とても残念でなりません。

ミスター競馬と慕われる野平祐二調教師の言葉は重い。だが一方で、学校教育というシステムによって将来を担うべき騎手というアーティストが果たして育つものなのかと、素朴な疑問が残る。学校というシステムは、一人の天才よりも、より多くの優等生を育てるために開かれていくと思われないが、かつて俳優を育てることを目指した『俳優座養成所』という機関があった。それは、世に次から次へと人材を産み出した。俳優を志す者にとって伝説の場所と言ってもいいだろう。だが後年この機関は、某大学の演劇科に昇格(?)したが、かつての隆盛には程遠いと言

わざるを得ない。この事実も、俳優というアーティストは、学校という場所では育たぬことをいみじくも実証している、と思う。

日本で唯一の競馬学校が、その独自のカリキュラムによって第二の福永洋一を産み出したとき、おそらく競馬学校のすばらしい価値は決定する。その意味でも、競馬学校卒業生の担うべき責務は大きい。昨年、新人で四十勝を稼いだ松永幹夫らに期待はかかる。

☆ 二月十九日。騎手試験発表の日。第三期生は九人が受験して八人が合格した。そしてそれ以外の騎手試験合格者はいなかった。また一人の同期生が消えた。

騎手となる幸運を来年に延ばした少年に、武藤善則のエピソードを贈ろう。彼は、競馬学校第一期生である。だがデビューは一年遅れた。騎手試験を落ちたとき、

——この悔やしさを腹一杯にため込んで、もう一度頑張ります。もうやるしかない。と、彼は忍耐の決意をせざるを得なかった。しかしそのときキラリと光った彼の純真な涙は、昨年関東の新人賞に結実し、今年ベストテン上位で奮闘している。真の悔やし涙は、いつか必ず喜びの涙に変わるものなのだ。

☆ 捕えたかったら、早く駆け出せ。 捕えたかったら、早く駆け出せ。 捕えたかったら、早く駆け出せ。 捕えたかったら、早く駆け出せ。 捕えたかったら、早く駆け出せ。 (ポール・フォール 幸福)

ついに騎手としてのスタート地点に立った八人の少年たち。彼らが騎手を志望した動機は様々だ。競馬好きの父親に連れられて行った真冬の競馬場で、寒さにふるえながら捨てられた馬券で遊んでいた者もいる。彼の場合、たまたま拾ったのが的中馬券で、そのことがやがて騎手となる契機となった。グリーングラスの菊花賞を見て、鮮やかにインを突いた安田富男の好騎乗に魅かれた者もいる。また吉永正人とミスターシービーが常識を超えて見せた感動の菊花賞に魅かれた者もいる。

八人の少年たちが幼い日に見た夢は、ようやくそのスタート地点にまで行き着いた。後は「早く駆け出す」ばかりだと、彼らは何故か体がワクワクするのを抑えられはしなかった。しかし確実に不安もあった。十年経っても一度聞いてみたい、騎手って何だろうかと彼らの一人がすぐさま答えた。

——心配しないでいいんです。十年も経ったら、俺もあいつも、とっくに消えるに決まっていますから。

結果を怖れぬ若さの裏側で、自らを冷たく見定めようとする不安をかかえ、それでも「早く駆け出す」ことを望んで止まぬ青春に、彼らが進む騎手の道の厳しさを改めて知らされた。

二月二十四日。デビューを目前に控えた彼らは、騎手研修に臨んだ。最後の講義で、関西の雄たる河内洋を迎えた。

——君らはこれから競馬場に向かうことになるけれど、今この瞬間にこそ減量の特権を活かしていくべきだ。来年になれば、また次の減量資格を持つ新人が現れて来るのだからねえ。

——騎手として物事を考える場合には、逆に逆にと考えていくと、今必要なことが見えてくる。例えばたくさん勝ちたいと思えば強い馬、走る馬に乗らなければならぬ。一頭の走る馬に乗るには、十頭の走らない馬にも乗る必要がある。だからたくさん馬に乗るべきだ。それには多くの人に好かれることだ、と、いうようにね。

——くれぐれも夢をはき違えないように野心を燃やして欲しい。

講義が終わって、八人の新しい騎手たちはそれぞれの厩舎へ向かった。誰もいなくなった部屋で、河内洋はさらに語ってくれた。

——所詮、学校の馬と競馬場の馬とは違うと思うからねえ。彼らもこれから実戦を通して馬の精神的な感覚とかをね。もし競馬が陸上競技のようなセパレートコースなら、力の強い馬が勝つに決まっている。でも同一直線上のスタートだから競馬は深い味わいがあるんだ。一生勉強だよ。騎手はただ自分一人の世界だからね。ハングリーでありたいな。

八人の新人騎手がレースに向かったとき、今日の特別講師河内洋は、すぐさま彼らの敵となる。「早く駆け出す」には、彼らの前に立ちはだかる壁は余りにも大きいのである。